

五輪開催期間における

日本のニュース番組の報道傾向

——北京五輪・ロンドン五輪・リオ五輪報道の比較から——

中 正 樹

1 はじめに

五輪が大規模なイベントとして成立する前提として、映像メディアとしてのテレビが重要な役割を果たしていることは、あらためて言うまでもない。藤竹暁は、1964年に開催された東京五輪の段階で、すでにそれが「マス・メディアの作り上げた『スポーツの祭典』」であり、「テレビ・オリンピック、あるいはマスコミ・オリンピック」であると結論づけた（藤竹 1967: 32-33）⁽¹⁾。そして、当時の国民の多くが東京五輪を「直接的」ではなく「間接的」にテレビを通じて視聴し、かつ競技映像が実況中継に加え録画中継や過去の映像を駆使して構成されていたことに触れ、「ほとんどすべての人たちにとっては、テレビで合成されたドラマ」が東京五輪であり、「テレビ・オリンピックこそがむしろ本物」であったと指摘した（藤竹 1985: 53-54）。

また、メディア・イベントの提唱者として知られる D・ダヤーンと E・カツは、同概念を「祭礼的なテレビ視聴」を通して私たちが経験する「テレビで放送されながらとり行われる行事、国民あるいは世界を席卷するような歴史的行事——多くは国家行事」と定義した上で（Dayan and Katz 1992=1996: 13）、五輪を「数億のテレビを観る人々を引

きつける」事例として取り上げている (Dayan and Katz 1992=1996: 45)。

以上のように、メディア研究の分野で五輪は「テレビを代表とするメディアに媒介された (mediated) されたもの」(阿部 2008:202) と解釈されてきた。そうした解釈の前提となっているのは、五輪開催期間の人々が最も接するマス・メディアはテレビであるという認識——確信である。

近年、インターネットの普及にともない、ネット動画で五輪を視聴する人が増加しつつある。国際五輪委員会 (IOC: International Olympic Committee) のレポートによれば、その視聴回数はロンドン五輪からリオ五輪にかけて倍増した。しかしそれによってテレビ視聴が減少したわけではなく、逆にロンドン五輪に比較して20%以上増加したという (IOC 2016)。テレビモニタリングの調査によると、日本でロンドン五輪をネット動画で視聴した人は11.8%で、またソーシャル・ビューイング (SNS に書き込みながら視聴する) のような視聴スタイルは3.4%程度に過ぎなかった。対して、テレビ視聴した人は98.0%と圧倒的に多かった。このデータについて、平山賢治は「オリンピックはやはり性別や世代を超えたキラークンテンツであって、『ながら観戦』や『内輪だけで盛り上がる』のではなく、『真剣に』『日本国民として』『家族で応援して』観たということなのかもしれない」と述べている (平山 2012: 27)。

ロンドン五輪時と比較すれば、現在は五輪をネット動画で視聴する層は増加しているだろうが、テレビ視聴を選択する傾向が極端に変化するとは考えにくい。したがって、現在でも日本ではテレビによる五輪視聴が主流であると思われる。もっとも、日本では五輪をテレビで視聴する傾向にあるとしても、皆がそれを中継で視聴できるわけではない。多くの人は競技が中継されている時間帯には働いているか、時差の影響で就寝しているからである。仮に視聴する時間があったとしても、すべての競技を視聴することは物理的に困難である。テレビで中継されない競技もある。しかしながら、私たちは多くの競技結果をあたかも実際に視聴したかのように知っている。それは、テレビに

よって編集され、再構成された競技の映像を、後から視聴しているからである。

そうした情報源の1つとして重要な役割を果たしているのが、ニュース番組である。先に藤竹がテレビによって構成された五輪を「本物」とみなしたように、ニュース番組がテレビによって構成された五輪をさらにニュースとして再構成して示すそれは、報道を通じて五輪を知ろうとする人々にとって、やはり「本物」となる。また、その開催期間、ニュース番組は通常の編成を変更して五輪に特化した報道形態を取る。同期間の報道内容を分析することは、五輪という世界的なスポーツ・イベントを日本のニュース番組がどのようなニュース価値判断にしたがって報道しているのかを知るための示唆を与えてくれる筈である。

以上のような問題意識のもと、本研究は五輪の開催期間にNHKおよび在京放送局における代表的なニュース番組が報道したニュースを量的に分析することを通じて、同期間における普遍的な報道傾向を明らかにする。具体的には、ニュースの「発生地」および「分野」の観点から、それぞれの報道量を分析する。その際、前者に関しては五輪の開催国に、後者に関しては五輪に関するニュース、とりわけ五輪競技に関するニュースに焦点を絞る。また、分析結果に普遍性を与えるべく、複数の五輪の開催期間をその分析の対象とする。

2 五輪報道に関する研究

五輪に関する報道は、私たちの「外国」に対するイメージや国家間の関係を認識するためのフレームの形成、そしてその修正に対して影響力を持っている (Real 1989)。そして映像が重視されるテレビニュースでは、「インパクトの強い映像は何度も繰り返し放送されることが多く、それが当該国のイメージに決定的な影響を与えることも少なくない」(萩原a 2007: i)。

以上のような観点のもと、五輪に関するニュースは「各種の試合や関連報道を通して様々な国のイメージを変化させる機会になっている」（上瀬 2007: 83）と捉えられ、それが外国イメージの変化にもたらす影響力について研究が進められてきた（例えば、高木ほか 1991; 村田ほか 1993; 向田ほか 2001; 村田ほか 2005; 上瀬ほか 2010; 佐久間ほか 2017など）。これらの研究では、五輪における日本の成績の是非、または特定の国に関する問題報道がイメージ変化に影響を与えた可能性が指摘されているが、一貫した結果は示されていない。

既存の研究からは、ニュースを始めとするメディアからの五輪に関する情報が、外国のイメージの変化に影響を与えることが推察されている。しかし、「実際に外国・外国人に関するどのような情報が、どの程度報道されているのか、メディア情報そのものについてはほとんど調査が行われていないのが現状」（上瀬 2007: 84）であった。

このような状況が生じた要因としては、研究者の関心が、五輪がどのように報道されたのかよりもその報道がどのような影響を与えたのかに向けられる傾向にあったことがあげられる。また、データベースや縮刷版の利用が容易な新聞とは異なり、テレビニュースには系統的に保存して公開するような利用可能なアーカイブが存在しないことも、その要因としてあげられる。さらに、仮にデータを揃えることができたとしても、映像と音声で構成されるテレビニュースの内容分析には多大な手間と時間がかかる。そのため、五輪に関するニュースは事例として質的に分析されることはあっても、量的に分析されることはほとんどなかった。

五輪の開催期間におけるニュース番組の内容分析は、2000年代以降に研究の蓄積が始まった。その嚆矢となるのが上瀬（2007）であり、2004年開催のアテネ五輪を対象として五輪に関係するニュースに含まれる外国関連情報について内容分析している。また横山（2007）は、2006年開催のトリノ五輪を対象として、五輪関係のニュースに含まれる外国イメージおよびそのメッセージについて内容分析している。

北京五輪以降、五輪開催期間のニュース番組の調査に継続的に取り組んできたのが国際テレビニュース研究会である。同研究会は、2008年開催の北京五輪、2012年開催のロンドン五輪、そして2016年開催のリオ・デ・ジャネイロ五輪（以後、リオ五輪と表記）を対象として、ほぼ共通した分析枠組みを用いて調査に取り組んできた（中 2009；中ほか 2015；中ほか 2020）。それらの研究は、各五輪の開催期間における NHK および在京放送局の代表的なニュース番組が報道したすべてのニュースを対象とした総合的な量的分析である。

五輪開催期間におけるニュース番組の普遍的な報道傾向を明らかにしようとするとき、単一の五輪のみを対象とするだけでは不十分である。その五輪の開催期間にたまたま生じた重大な事件が、報道傾向に影響を与える可能性があるからである。したがって、偶然性の影響を考慮するならば、複数の五輪の開催期間における報道内容を比較する必要がある。

以上のような認識のもと、本研究では国際テレビニュース研究会による過去3回の夏季五輪の開催期間における調査結果を用いて、その内容を比較する。

3 比較対象となった五輪

本研究で比較対象となったのは、2008年開催の北京五輪、2012年開催のロンドン五輪、そして2016年開催のリオ五輪である。以下、その概要について述べる。

北京五輪は、2008年8月8日から8月24日までの17日間、中国の首都北京を主会場として開催されたオリンピック競技大会である。夏季五輪としては、第29回目に当たる。参加国と地域は204カ国、競技種目数は28競技302種目、参加選手数は10,942名で、そのいずれもが史上最多であった。また、アジアで夏季五輪が開催されたのは、1988年のソウル五輪以来、20年ぶりのことであった。

中国政府は、北京五輪を国威発揚の重要なイベントとしてとらえた。そして、「迎接奥运会、公创文明城（五輪を迎え、文明的社会を創ろう）」というスローガンのもと、国力を挙げて五輪を準備、開催した。しかしながら、国際世論の一部には中国による五輪開催への反対や、参加ボイコットを呼びかける動きがあった。それはチベット問題をはじめとする中国政府による人権侵害や外交政策を主な理由とするものであった。実際に、聖火リレーでは中国政府に対する抗議を目的とした妨害活動が相次いだ。同様の動きは、日本の世論でもみられた。

ロンドン五輪は、2012年7月27日から8月12日までの17日間、主に英国の首都ロンドンを主会場として開催されたオリンピック競技大会である。夏季五輪としては、第30回に当たる。参加国と地域は204カ国、競技種目数は26競技302種目、参加選手数は10,568名であった。また、ロンドンで夏季五輪が開催されるのは1908年、1948年に続いて3回目のことで、通算3回目の開催は五輪史上初であった。

1908年のロンドン五輪は、万博と同時に開催された。国威発揚の装置であった万博と共催されていたことは、五輪というイベントの特徴を明示している。また、1944年に予定されていたロンドン五輪は第二次世界大戦の勃発によって中止となったが、大戦後の1948年に開催された。同大会は、戦後の英国あるいは欧州の復興への思いが込められた大会となった。このように、過去2回の五輪はいずれも国威発揚のためのイベントとしての性格が強かった。対して、通算3回目となる同五輪では、国家主義を超えた人類のための祭典としての側面が強調された。その際のスローガン「Inspire a generation」は、ロンドン五輪を通じて用いられた。

リオ五輪は、2016年8月5日から8月21日までの17日間、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロを主会場として開催されたオリンピック競技大会である。夏季五輪としては、第31回に当たる。参加国と地域は205カ国、競技種目数は28競技306種目、参加選手数は11,238名で、そのいずれもが史上最多であった。また、南米での開催は五輪史上初であっ

た。

南米での五輪開催は、五輪文化に空間的な多様性があることを示した。また、出場した国や地域、選手の多様性が重なり合ったりリオ五輪は、世界規模で広がりを見せつつある文化的な理念、「ダイバーシティ」の発揚の場ともなった。同五輪の大会スローガンは「A New World」であり、「境界を取り除き、他者を尊重し、一体化を進めるという理念」(『毎日新聞』2016.8.6朝刊)が込められていた。こうしたブラジルの姿勢は、五輪を国威発揚のイベントと捉えた中国の「ナショナル」重視の姿勢や、「Inspire a Generation」のスローガンで世代を超えて受け継がれる「文化」に訴えたイギリスの姿勢と異なるものであった。

4 研究の方法

本研究で比較対象となる過去3回の夏季五輪の開催期間における内容分析(中 2009; 中ほか 2015; 中ほか 2020)は、ほぼ共通の分析枠組みで実施されている。本章では、その枠組みについて概説する。

4.1 調査対象

調査対象は、NHK および在京放送局(日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日)が提供する代表的なニュース番組である。調査対象となったニュース番組は、NHK の『NHK ニュース7』⁽²⁾、日本テレビの『NEWS ZERO』、TBS の『NEWS23』⁽³⁾、フジテレビの『ユアタイム あなたの時間』⁽⁴⁾、およびテレビ朝日の『報道ステーション』の5番組である。なお、これらはリオ五輪時の番組名称であり、北京五輪・ロンドン五輪では異なる名称だった番組もある。

4.2 調査期間

調査期間は、五輪開会式4日前から閉会式4日後までとした。すな

わち、北京五輪の場合は2008年8月4日から8月29日までの計26日間、ロンドン五輪の場合は2012年7月24日から8月16日までの計24日間、リオ五輪の場合は2016年8月1日から2016年8月25日までの計25日間である⁽⁵⁾。

4.3 分析項目

調査期間に各ニュース番組で放送されたすべてのニュースを、表1で示した分析項目でコーディングした。内容項目の「ニュースの発生地①」および「ニュースの発生地②」については表2を⁽⁶⁾、「ニュースの分野①」については表3を、そして「ニュースの分野②」については表4を⁽⁷⁾、それぞれ参照されたい。また、ニュース番組のオープニングやエンディング、および番組内における出演者による掛け合い等の会話は、ニュースとしてカウントしていない。

なお、本研究の分析単位は「ニュース本数」および「ニュース時間」である⁽⁸⁾。以後、表においてニュース時間を扱うとき、その単位は「秒」とする。

表1 分析項目

項目分類	分析項目	概要
基本項目	日付	ニュースが放送された日付
	放送局コード	ニュースが放送された対象番組を識別するための略称
	分/秒	ニュースの開始時刻と終了時刻「分/秒」
	ニュース時間	ニュースの放送時間（秒）
映像項目	タイトルテロップ/サブタイトルテロップ	ニュースの「タイトルテロップ」および「サブタイトルテロップ」
	映像内容	ニュース映像の具体的な内容
内容項目	ニュースの発生地①	ニュースの主たる発生地
	ニュースの発生地②	「ニュースの発生地①」に次いで関係がある地域
	ニュースの分野①	ニュースが関係する分野
	ニュースの分野②	五輪に関係する分野
	開催国に関する言及・発言	開催国に関係する事象や物、人物等に対する言及や発言

表2 ニュースの発生地①・②

コード	関係地域
1 自国	日本
2 開催国	五輪の開催国
3 アジア	日本、中東、ロシアを除くアジア諸国と地域
4 北米	米国、カナダ
5 中東	アラブ諸国
6 欧州	ヨーロッパ、ロシアを含む
7 中南米	メキシコ以南の米大陸
8 アフリカ	アフリカ大陸
9 大洋州	オーストラリア、ニュージーランド等
10 その他	北極、南極、領海に属さない洋上・海底、宇宙空間、国際（世界）等

表3 ニュースの分野①

コード	関係分野
100 政治	政策、選挙、外交、議会、国際機関、その他政治
200 経済	景気・失業、金融市場、貿易、消費、流通、労働、税金、その他経済
300 社会	犯罪、事件・事故、イベント（人為的）、災害、社会現象、裁判、教育、デモ、その他社会
400 軍事	紛争・戦争（テロリズム含む）、兵器、軍事基地、自衛隊、安全保障、その他軍事
500 環境	環境汚染・破壊、環境保護、環境運動、その他環境
600 運輸／通信	航空、船舶、自動車、鉄道、その他運輸、通信技術、通信サービス、放送サービス、その他運輸・通信（放送含む）
700 科学／技術／文化／芸術	新技術、宇宙、医療、発見・発明、その他科学・技術、音楽、映画、演劇、その他文化・芸術
800 歳時／気候	暦・祭・年中行事、気候（季節）、天気予報、その他歳事・気候
900 スポーツ	五輪競技、その他スポーツ

表4 ニュースの分野②

コード			
901 開閉会式	910 ボクシング	919 卓球	928 アーチェリー
902 その他 ⁽⁹⁾	911 バレーボール	920 馬術	929 野球 ※1
903 ミックス ⁽¹⁰⁾	912 体操	921 フェンシング	930 トライアスロン
904 陸上競技	913 バスケットボール	922 柔道	931 テコンドー
905 水泳	914 レスリング	923 ソフトボール ※1	932 ラグビー ※2
906 サッカー	915 セーリング	924 バドミントン	933 ゴルフ ※2
907 テニス	916 ウエイトリフティング	925 射撃	
908 ボート	917 ハンドボール	926 近代五種	
909 ホッケー	918 自転車	927 カヌー	

※1 ロンドン五輪以降、除外された競技種目。

※2 リオ五輪で追加された競技種目。

5 調査結果の比較

本章では、各五輪の開催期間に代表的なニュース番組が報道したすべてのニュースを集計した結果を比較していく⁽¹¹⁾。

まず、全体の報道量について述べる。北京五輪の調査対象日数は26日で、ニュース本数は1,657本、ニュース時間は266,401秒であった。1日の平均ニュース本数は64本、平均ニュース時間は10,246秒である。また、ニュース1本あたりの平均時間は160.8秒であった。次いで、ロンドン五輪の調査対象日数は24日で、ニュース本数は1,372本、ニュース時間は224,480秒であった。1日の平均ニュース本数は57本、平均ニュース時間は9,353秒である。また、ニュース1本あたりの平均時間は163.6秒であった。そして、リオ五輪の調査対象日数は25日で、ニュース本数は1,605本、ニュース時間は244,023秒であった。1日の平均ニュース本数は64本、平均ニュース時間は9,761秒である。また、ニュース1本あたりの平均時間は152.0秒であった。

以後、これらのデータを「ニュースの発生地」および「ニュースの分野」の観点から比較していく⁽¹²⁾。

5.1 ニュースの発生地

5.1.1 ニュースの発生地

表5および表6は、ニュースの主たる発生地であることを示す「ニュースの発生地①」で示したコードにしたがって抽出したニュースを、それぞれニュース本数およびニュース時間でカウントしたものである。

表5 五輪開催期間におけるニュースの発生地（本数）

発生地	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合
1 自国	940	56.7%	871	63.5%	998	62.2%
2 開催国	483	29.1%	373	27.2%	436	27.2%
3 アジア	49	3.0%	50	3.6%	65	4.0%
4 北米	84	5.1%	53	3.9%	52	3.2%
5 中東	27	1.6%	10	0.7%	10	0.6%
6 欧州	68	4.1%	9	0.7%	35	2.2%
7 中南米	3	0.2%	3	0.2%	2	0.1%
8 アフリカ	2	0.1%	1	0.1%	6	0.4%
9 大洋州	0	0.0%	1	0.1%	1	0.1%
10 その他	1	0.1%	1	0.1%	0	0.0%
合計	1,657	100.0%	1,372	100.0%	1,605	100.0%

表6 五輪開催期間におけるニュースの発生地（時間）

発生地	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	時間	割合	時間	割合	時間	割合
1 自国	128,135	48.1%	132,081	58.8%	146,895	60.2%
2 開催国	102,154	38.3%	74,381	33.1%	78,883	32.3%
3 アジア	5,500	2.1%	6,967	3.1%	5,326	2.2%
4 北米	10,489	3.9%	8,476	3.8%	4,798	2.0%
5 中東	7,760	2.9%	1,072	0.5%	926	0.4%
6 欧州	11,482	4.3%	819	0.4%	5,471	2.2%
7 中南米	513	0.2%	161	0.1%	152	0.1%
8 アフリカ	340	0.1%	236	0.1%	1,529	0.6%
9 大洋州	0	0.0%	258	0.1%	43	0.0%
10 その他	28	0.0%	29	0.0%	0	0.0%
合計	266,401	100.0%	224,480	100.0%	244,023	100.0%

ニュース本数をみると、各五輪で「1 自国」の占める割合がもっとも多く、「2 開催国」がそれに次いだ。「1 自国」のニュースは、北京五輪では56.7%、ロンドン五輪では63.5%、リオ五輪では62.2%であり、全体の6割前後を占めた。また、「2 開催国」のニュースは、北京五輪では29.1%、ロンドン五輪では27.2%、リオ五輪では27.2%であり、全体の3割弱を占めた。「1 自国」と「2 開催国」を合わせた割合は、

各五輪で全体の9割前後を占めた。

ニュース時間をみると、ニュース本数と同様に、各五輪で「1 自国」が占める割合がもっとも多く、「2 開催国」がそれに次いだ。「1 自国」のニュースは、北京五輪では48.1%、ロンドン五輪では58.8%、リオ五輪では60.2%であり、全体の6割前後を占めた。また、「2 開催国」のニュースは、北京五輪では38.3%、ロンドン五輪では33.1%、リオ五輪では32.3%であり、全体の3割強を占めた。「1 自国」と「2 開催国」を合わせた割合は、ニュース本数の場合と同様に、各五輪で全体の9割前後を占めた。

以上のように、ニュース番組が報道するニュースの発生地は、各五輪で「1 自国」を除けば「2 開催国」に関するニュースが最も多い。それでは、「2 開催国」のどの分野がニュースとして報道されているのだろうか。

5.1.2 開催国を発生地とするニュース

表7および表8は、開催国を発生地とするニュースの分野を「ニュースの発生地①」と「ニュースの分野①」のデータをクロスさせることで抽出し、それぞれニュース本数およびニュース時間でカウントしたものである。

表7 開催国を発生地とするニュースの分野（本数）

分野	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合
100 政治	16	3.3%	2	0.5%	1	0.2%
200 経済	4	0.8%	2	0.5%	0	0.0%
300 社会	50	10.4%	5	1.3%	21	4.8%
400 軍事	14	2.9%	0	0.0%	0	0.0%
500 環境	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
600 運輸／通信	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
700 科学／技術／文化／芸術	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
800 歳時／気候	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
900 スポーツ	399	82.6%	364	97.6%	414	95.0%
合計	483	100.0%	373	100.0%	436	100.0%

表8 開催国を発生地とするニュースの分野（時間）

分野	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	時間	割合	時間	割合	時間	割合
100 政治	2,523	2.5%	318	0.4%	24	0.0%
200 経済	444	0.4%	103	0.1%	0	0.0%
300 社会	15,606	15.3%	765	1.0%	2,213	2.8%
400 軍事	2,734	2.7%	0	0.0%	0	0.0%
500 環境	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
600 運輸／通信	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
700 科学／技術／文化／芸術	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
800 歳時／気候	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
900 スポーツ	80,847	79.1%	73,195	98.4%	76,646	97.2%
合計	102,154	100.0%	74,381	100.0%	78,883	100.0%

ニュース本数をみると、各五輪で「900 スポーツ」が占める割合がもっとも多く、「300 社会」がそれに次いだ。「900 スポーツ」のニュースは、北京五輪では82.6%、ロンドン五輪では97.6%、リオ五輪では95.0%であり、開催国を発生地とするニュースの大部分を占めた。また、「300 社会」のニュースは、北京五輪では10.4%、ロンドン五輪では1.3%、リオ五輪では4.8%であり、2番目に多いとしても、北京五輪を除けばその占める割合は低かった。

ニュース時間をみると、ニュース本数と同様に、各五輪で「900 スポーツ」の占める割合がもっとも多く、「300 社会」がそれに次いだ。「900 スポーツ」のニュースは、北京五輪では79.1%、ロンドン五輪では98.4%、リオ五輪では97.2%であり、開催国を発生地とするニュースの大部分を占めた。また、「300 社会」のニュースは、北京五輪では15.3%、ロンドン五輪では1.0%、リオ五輪では2.8%であり、2番目に多いとしても、ニュース本数の場合と同様に、北京五輪を除けばその占める割合は低かった。

以上のように、ニュース番組が報道する開催国を発生地とするニュースの分野は、当然のことながら五輪にかかわる「900 スポーツ」に関するニュースが圧倒的に多い⁽¹³⁾。その際、北京五輪では「900 スポーツ」以外の分野もそれなりに報道されているのに対して、それ以

外の五輪ではほぼ「900 スポーツ」のみが報道されているという違いがみられる。

5.2 ニュースの分野

5.2.1 ニュースの分野

表9および表10は、ニュースの主たる分野であることを示す「ニュースの分野①」のコードにしたがって抽出したニュースを、それぞれニュース本数およびニュース時間でカウントしたものである。

表9 五輪開催期間におけるニュースの分野（本数）

分野	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合
100 政治	162	9.8%	130	9.5%	130	8.1%
200 経済	73	4.4%	56	4.1%	36	2.2%
300 社会	449	27.1%	321	23.4%	469	29.2%
400 軍事	64	3.9%	34	2.5%	51	3.2%
500 環境	5	0.3%	10	0.7%	1	0.1%
600 運輸／通信	7	0.4%	17	1.2%	5	0.3%
700 科学／技術／文化／芸術	24	1.4%	34	2.5%	79	4.9%
800 歳時／気候	138	8.3%	136	9.9%	138	8.6%
900 スポーツ	735	44.4%	634	46.2%	696	43.4%
合計	1,657	100.0%	1,372	100.0%	1,605	100.0%

表10 五輪開催期間におけるニュースの分野（時間）

分野	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	時間	割合	時間	割合	時間	割合
100 政治	30,320	11.4%	30,472	13.6%	29,723	12.2%
200 経済	7,272	2.7%	6,604	2.9%	1,486	0.6%
300 社会	71,987	27.0%	41,630	18.5%	62,495	25.6%
400 軍事	12,434	4.7%	8,795	3.9%	7,244	3.0%
500 環境	977	0.4%	1,582	0.7%	225	0.1%
600 運輸／通信	987	0.4%	2,189	1.0%	281	0.1%
700 科学／技術／文化／芸術	6,616	2.5%	3,629	1.6%	5,074	2.1%
800 歳時／気候	13,226	5.0%	14,430	6.4%	22,088	9.1%
900 スポーツ	122,582	46.0%	115,149	51.3%	115,407	47.3%
合計	266,401	100.0%	224,480	100.0%	244,023	100.0%

ニュース本数をみると、各五輪で「900 スポーツ」が占める割合がもっとも多く、「300 社会」がそれに次いだ。「900 スポーツ」のニュースは、北京五輪では44.4%、ロンドン五輪では46.2%、リオ五輪では43.4%であり、全体の4割強を占めた。また、「300 社会」のニュースは、北京五輪では27.1%、ロンドン五輪では23.4%、リオ五輪では29.2%であり、北京五輪およびリオ五輪では全体の3割弱、ロンドン五輪では2割強を占めた。「900 スポーツ」と「300 社会」を合わせた割合は、各五輪で全体の7割前後を占めていた。

ニュース時間をみると、ニュース本数と同様に、各五輪で「900 スポーツ」が占める割合がもっとも多く、「300 社会」がそれに次いだ。「900 スポーツ」のニュースは、北京五輪では46.0%、ロンドン五輪では51.3%、リオ五輪では47.3%であり、全体の5割前後を占めた。また、「300 社会」のニュースは、北京五輪では27.0%、ロンドン五輪では18.5%、リオ五輪では25.6%であり、北京五輪およびリオ五輪では3割弱、ロンドン五輪では2割弱を占めた。「900 スポーツ」と「300 社会」を合わせた割合は、ニュース本数の場合と同様に、各五輪で全体の7割前後を占めていた。

以上のように、ニュース番組が報道するニュースの分野は、各五輪で「900 スポーツ」に関するニュースが最も多い。その際、その多くを占めたのが五輪競技に関する報道であることはいうまでもないが、それ以外にも日本における人気スポーツである野球——甲子園、プロ野球、そして大リーグ——を含んでいた。五輪の開催期間であっても、野球に関するニュースは、試合があれば報道されていた。

5.2.2 五輪に関するニュース

「ニュースの分野①」のコードで分類したとき、五輪に関するニュースは、「900 スポーツ」のみならず、「300 社会」等の別の分野にも含まれる。それでは、各五輪の開催期間、「五輪関係」と「五輪以外」のニュースはどのような割合を示すのだろうか。表11および表12は、その割合を示したものである。

表11 五輪に関するニュースがすべてのニュースに占める割合（本数）

	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合
五輪関係	575	34.7%	444	32.4%	525	32.7%
五輪以外	1,082	65.3%	928	67.6%	1,080	67.3%
合計	1,657	100.0%	1,372	100.0%	1,605	100.0%

表12 五輪に関するニュースがすべてのニュースに占める割合（時間）

	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	時間	割合	時間	割合	時間	割合
五輪関係	118,874	44.6%	89,999	40.1%	95,831	39.3%
五輪以外	147,527	55.4%	134,481	59.9%	148,192	60.7%
合計	266,401	100.0%	224,480	100.0%	244,023	100.0%

以上のように、各五輪の開催期間、五輪に関するニュースは、ニュース本数で全体の3割以上、ニュース時間で4割前後を占めていた。いずれも、全体の報道量において大きな割合を占めていたことがわかる。

次いで、五輪に関するニュースの内訳を確認してみよう。表13および表14は、五輪に関係していることを示す「ニュースの分野②」のコードにしたがって抽出したニュースを、それぞれニュース本数およびニュース時間でカウントしたものである。グレーの部分は、その競技種目が当該五輪では実施されなかったことを意味する。なお、割合がゼロになっている競技種目はまったく報道されなかったわけではなく、「903 ミックス」において他の競技種目と一緒にまとめて報道された可能性がある。

表13 五輪に関するニュース（本数）

コード	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合
901 開閉会式	32	5.6%	12	2.7%	16	3.0%
902 その他	103	18.2%	46	10.5%	110	21.0%
903 ミックス	32	5.6%	56	12.8%	71	13.5%
904 陸上競技	56	9.9%	26	5.9%	34	6.5%
905 水泳	69	12.2%	43	9.8%	67	12.8%
906 サッカー	44	7.8%	90	20.5%	16	3.0%
907 テニス	3	0.5%	4	0.9%	13	2.5%
908 ボート	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
909 ホッケー	3	0.5%	0	0.0%	0	0.0%
910 ボクシング	0	0.0%	11	2.5%	1	0.2%
911 バレーボール	9	1.6%	10	2.3%	3	0.6%
912 体操	24	4.2%	20	4.6%	28	5.3%
913 バスケットボール	2	0.4%	1	0.2%	5	1.0%
914 レスリング	17	3.0%	21	4.8%	26	5.0%
915 セーリング	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
916 ウエイトリフティング	1	0.2%	1	0.2%	5	1.0%
917 ハンドボール	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%
918 自転車	1	0.2%	1	0.2%	0	0.0%
919 卓球	16	2.8%	21	4.8%	42	8.0%
920 馬術	2	0.4%	2	0.5%	1	0.2%
921 フェンシング	10	1.8%	4	0.9%	1	0.2%
922 柔道	36	6.3%	47	10.7%	38	7.2%
923 ソフトボール	25	4.4%				
924 バドミントン	13	2.3%	14	3.2%	28	5.3%
925 射撃	3	0.5%	1	0.2%	0	0.0%
926 近代五種	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
927 カヌー	7	1.2%	0	0.0%	4	0.8%
928 アーチェリー	0	0.0%	6	1.4%	3	0.6%
929 野球	55	9.7%				
930 トライアスロン	2	0.4%	1	0.2%	0	0.0%
931 テコンドー	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%
932 ラグビー					11	2.1%
933 ゴルフ					2	0.4%
合計	567	100.0%	438	100.0%	525	100.0%

表14 五輪に関するニュースの分野（時間）

コード	北京五輪		ロンドン五輪		リオ五輪	
	時間	割合	時間	割合	時間	割合
901 開閉会式	4,964	4.3%	2,191	2.5%	2,675	2.8%
902 その他	25,871	22.2%	7,169	8.1%	13,168	13.7%
903 ミックス	7,321	6.3%	21,379	24.1%	12,795	13.4%
904 陸上競技	8,310	7.1%	4,049	4.6%	3,396	3.5%
905 水泳	20,169	17.3%	8,082	9.1%	15,940	16.6%
906 サッカー	8,392	7.2%	21,699	24.4%	3,226	3.4%
907 テニス	214	0.2%	199	0.2%	1,786	1.9%
908 ボート	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
909 ホッケー	63	0.1%	0	0.0%	0	0.0%
910 ボクシング	0	0.0%	2,146	2.4%	58	0.1%
911 バレーボール	446	0.4%	953	1.1%	144	0.2%
912 体操	5,108	4.4%	4,021	4.5%	9,633	10.1%
913 バスケットボール	244	0.2%	77	0.1%	401	0.4%
914 レスリング	3,731	3.2%	4,463	5.0%	6,784	7.1%
915 セーリング	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
916 ウエイトリフティング	80	0.1%	32	0.0%	389	0.4%
917 ハンドボール	126	0.1%	0	0.0%	0	0.0%
918 自転車	28	0.0%	34	0.0%	0	0.0%
919 卓球	3,017	2.6%	3,580	4.0%	10,134	10.6%
920 馬術	52	0.0%	299	0.3%	34	0.0%
921 フェンシング	2,343	2.0%	1,140	1.3%	42	0.0%
922 柔道	6,567	5.6%	4,932	5.6%	7,930	8.3%
923 ソフトボール	6,196	5.3%				
924 バドミントン	1,689	1.4%	1,563	1.8%	5,695	5.9%
925 射撃	142	0.1%	172	0.2%	0	0.0%
926 近代五種	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
927 カヌー	233	0.2%	0	0.0%	567	0.6%
928 アーチェリー	0	0.0%	570	0.6%	93	0.1%
929 野球	11,046	9.5%				
930 トライアスロン	141	0.1%	23	0.0%	0	0.0%
931 テコンドー	157	0.1%		0.0%		0.0%
932 ラグビー				0.0%	849	0.9%
933 ゴルフ				0.0%	92	0.1%
合計	116,650	100.0%	88,773	100.0%	95,831	100.0%

五輪開催期間における日本のニュース番組の報道傾向（中）

四三（二二九）

ここで、五輪に関するニュースのうち、五輪競技の報道量に焦点を合わせてみたい。表15および図16は、表13および表14のデータのうち、個別競技以外のコードのデータ（「901 開閉会式」、「902 その他」、「903 ミックス」）を除いて、報道量上位の5競技をまとめたものである。なお、本研究ではメダルの獲得と報道量の相関を考察するため、以後メダルについては、当該五輪の開催期間に獲得されたメダルを前提に言及する⁽¹⁴⁾。

表15 報道量上位の5競技（本数）

順位	コード	北京五輪		コード	ロンドン五輪		コード	リオ五輪	
		本数	割合		本数	割合		本数	割合
1	905 水泳	69	12.2%	906 サッカー	90	20.5%	905 水泳	67	12.8%
2	904 陸上競技	56	9.9%	922 柔道	47	10.7%	919 卓球	42	8.0%
3	929 野球	55	9.7%	905 水泳	43	9.8%	922 柔道	38	7.2%
4	906 サッカー	44	7.8%	904 陸上競技	26	5.9%	904 陸上競技	34	6.5%
5	922 柔道	36	6.3%	914 レスリング	21	4.8%	912 体操	28	5.3%

表16 報道量上位の5競技（時間）

順位	コード	北京五輪		コード	ロンドン五輪		コード	リオ五輪	
		時間	割合		時間	割合		時間	割合
1	905 水泳	20,169	17.3%	906 サッカー	21,699	24.4%	905 水泳	15,940	16.6%
2	929 野球	11,046	9.5%	905 水泳	8,082	9.1%	919 卓球	10,134	10.6%
3	906 サッカー	8,392	7.2%	922 柔道	4,932	5.6%	912 体操	9,633	10.1%
4	904 陸上競技	8,310	7.1%	914 レスリング	4,463	5.0%	922 柔道	7,930	8.3%
5	922 柔道	6,567	5.6%	904 陸上競技	4,049	4.6%	914 レスリング	6,784	7.1%

北京五輪における競技別の報道量は、順位に多少の違いはあるが、ニュース本数、ニュース時間ともに「905 水泳」、「904 陸上競技」、「929 野球」、「905 サッカー」、「922 柔道」に関するニュースが上位を占めた（ニュース本数順）。なお、同五輪で日本が獲得した金メダルは9個で、多い順から柔道が4個、水泳が2個、レスリングが2個、ソフトボールが1つであった。これらの競技のうち、報道量で上位に入ったのは「905 水泳」、「922 柔道」の2競技であった。それ以外の競技では、「904 陸上競技」の銅メダルを除いてメダルの獲得はなかった。

ロンドン五輪における競技別の報道量は、順位に多少の違いはあるが、ニュース本数、ニュース時間ともに「906 サッカー」、「922 柔道」、

「905 水泳」、「904 陸上競技」、「914 レスリング」に関するニュースが上位を占めた（ニュース本数順）。なお、同五輪で日本が獲得した金メダルは7個で、多い順からレスリングが4個、ボクシングが1個、体操が1個、柔道が1個であった。これらの競技のうち、報道量で上位に入ったのは「922 柔道」、「914 レスリング」の2競技であった。それ以外の競技では、「906 サッカー」が女子の部で銀メダルを、「905 水泳」が銀メダル3個、銅メダル8個を、「904 陸上競技」が銅メダル1個を獲得した。

リオ五輪における競技別の報道量は、順位に多少の違いはあるが、ニュース本数、ニュース時間ともに「905 水泳」、「919 卓球」、「922 柔道」、「912 体操」に関するニュースが上位を占めた（ニュース本数順）。これら以外では、ニュース本数で「904 陸上競技」が4位、ニュース時間で「914 レスリング」が5位に入っている。なお、同五輪で日本が獲得した金メダルは12個で、多い順からレスリングが4個、柔道が3個、水泳が2個、体操が2個、バドミントンが1個であった。これらの競技のうち、報道量で上位に入ったのは「905 水泳」、「922 柔道」、「912 体操」、「914 レスリング」（ニュース時間のみ）の4競技であった。それ以外の競技では、「919 卓球」が銀メダルを1個と銅メダルを2個、「904 陸上競技」が銀メダルと銅メダルを各1個獲得した。

以上のように、報道量で上位を占める五輪競技の多くは、メダルを獲得している。しかし、メダルの獲得がそのまま報道量の順位につながっているわけではない。したがって、それ以外の要素も報道量に影響を与えていると考えられる。

6 五輪開催期間の報道傾向に対する考察

6.1 ニュースの発生地

ニュースの発生地の報道量を比較すると、各五輪の開催期間において「1 自国」の占める割合が最も多く、それに「2 開催国」が次ぐ割

合を示した。その際、「1 自国」および「2 開催国」の占める割合が、ニュース本数、ニュース時間ともにロンドン五輪とリオ五輪が近似値を示しているのに対して、北京五輪はやや異なる傾向を示した。同五輪は他の五輪と比較して、「1 自国」の割合が少なく、「2 開催国」の割合が多くなっている。

次いで「2 開催国」の報道量をニュースの分野の観点から比較すると、各五輪の開催期間において「900 スポーツ」が最も多く、それに「300 社会」が次ぐ割合を示した。「2 開催国」の報道量で最も多いニュースの分野が「900 スポーツ」であることは、いわば当然のことであるが、五輪によってそれらが占める割合は異なった。報道量で「900 スポーツ」の占める割合はロンドン五輪とリオ五輪ではニュース本数、ニュース時間ともに100%に近い数値を示したのに対して、北京五輪ではそれぞれ8割前後にとどまった。しかし、同五輪の「900 スポーツ」の報道量が他の五輪と比較して少なかったわけではない。調査対象日数が異なるので単純に比較はできないが、3つの五輪の中でそのニュース本数は2番目であり、かつニュース時間は最も多かった。こうした違いが生じたのは、北京五輪において「900 スポーツ」以外の分野のニュースが、他の2つの五輪と比較して明らかに多く報道されていたからである。例えば、次点の「300 社会」のニュース時間は、ロンドン五輪では1.0%、リオ五輪では2.8%に過ぎないが、北京五輪では15.3%を占めている。

ちなみに、ロンドン五輪で「300 社会」に分類されたニュース5本のうち4本は、競技会場に空席が目立つことを指摘するものなど広義には五輪に関するニュースであった⁽¹⁵⁾。また、リオ五輪で「300 社会」に分類されたニュース21本は、米国の競泳選手が強盗被害に遭遇したがそれが狂言だったことに関するものなど、そのすべてが広義には五輪に関するニュースであった。すなわち、「あくまで報道量の観点から述べるなら、リオ五輪の開催期間、日本のニュース番組はブラジルを主たる発生地とするニュースを選択するにあたり、それが『五輪』関

係のニュースであることに価値を見出していた」(中ほか 2020: 53)。

以上のように、ロンドン五輪とリオ五輪において、「300 社会」に分類されたのは、ほぼすべてが五輪に関するニュースであった。

対して、北京五輪で「300 社会」に分類されたニュース50本のうち、広義には五輪に関するものは35本であった。残り15本の内訳は、日本で発生した毒ギョーザ事件に関するニュースが6件、新疆ウイグル自治区における警察などに対する襲撃事件に関するニュースが5件⁽¹⁶⁾、チベット問題への抗議で日本人女性らが中国当局に拘束されたことに関するニュースが2件、その他が2件であった。これらのニュースのうち、警察などに対する襲撃事件は北京五輪開催前後における中国当局への攻撃であり、グローバルなニュース価値を有している。しかし、毒ギョーザ事件や日本人女性らの拘束に関するニュースはそうではない。それらは、日本と関わりがあったからこそニュースになったといえる。

続くロンドン五輪とリオ五輪の開催期間、中国を発生地とするニュースはさほど多くない。両五輪において中国を発生地とするニュースは「3 アジア」に含まれるが、ロンドン五輪における同地域の報道量は、ニュース本数で3.6%、ニュース時間で3.1%であり、その主たる報道内容は韓国大統領による竹島上陸に関するニュースであった。また、リオ五輪における同地域の報道量もニュース本数で4.0%、ニュース時間で2.2%であり、その主たる報道内容は北朝鮮による弾道ミサイル発射に関するニュースであった。

日本のテレビニュースにおける外国関連情報を分析した萩原によれば、日本の国際報道において重視されているのは米国や欧州、そしてアジアであり、それに比べるとアフリカ、中東、中南米に関する報道量は圧倒的に少なくなる傾向にあるという(萩原b 2007: 317)。また、「一般に海外で発生した事件については、日本や日本人が関与したことが日本のメディアにとってのニュース価値を高めるうえで決定的な役割を果たす」(萩原c 2007: 45)。萩原の指摘した国際報道の特徴は、五輪

の開催期間を対象とした本研究でも確認できる。

しかしながら、北京五輪における開催国を発生地とするニュースの報道量は、上記の国際報道の特徴における例外を示すものである。ロンドン五輪とリオ五輪におけるニュースの発生地の分析から明らかになったのは、五輪の開催期間において確かに開催国を発生地とするニュースの報道量は増加したが、そのほとんどは「900 スポーツ」に分類されるニュースであり、それ以外のニュースもほとんどが広義には五輪に関するものであって、それを除けば開催国自体のニュースが増加したわけではなく、ゆえに五輪に関するニュースを除けば国際報道の特徴は変化しないということであった。

対して、北京五輪においてはそう言い切れない部分がある。図7・8で示したように、同五輪において開催国を発生地とするニュースの報道量は他の2つの五輪と比較して明らかに多い。「900 スポーツ」以外の分野でも、それなりにニュースが報道されている。開催国を発生地とするニュースのうち、「900 スポーツ」以外の分野の報道量は、ロンドン五輪ではニュース本数で2.4%、ニュース時間で1.6%、またリオ五輪ではニュース本数で5.0%、ニュース時間で2.8%に過ぎない。しかし、北京五輪ではニュース本数で17.4%、ニュース時間で20.9%を占めている。また、五輪に直接関係するわけではないが広義には関係するニュースが「100 政治」、「200 経済」、「300 社会」、「400 軍事」といった複数の分野に存在しており、それらを合わせたニュース本数は14.5%、ニュース時間の18.8%を占めていた。その要因として考えられるのは、他の開催国と比較して密接な中国との関係である。この関係性が影響して、中国という国家に対するニュース価値が、北京五輪という触媒によって一時的にせよ高まった。そうした可能性を、開催国を発生地とするニュースの分野のデータは示唆している。

以上の考察から、五輪の開催国に関するニュースについて以下の2点が指摘できる。

第1に、五輪の開催期間、外国を発生地とするニュースのうち開催

国を発生地とするニュースの報道量は最も多くなるが、そのほとんどは五輪に関係するニュースであり、それ以外のニュースが増加するわけではない。五輪に関係するニュースを除けば、外国を発生地とするニュースの報道傾向は開催期間以外とほぼ同じ傾向を示す。少なくともその開催期間、五輪は開催国自体に対するニュース価値を特に高めるわけではない。

第2に、第1の指摘の例外として、開催国と日本が密接な関係にある場合、五輪の開催期間、その国家に対するニュース価値が高まる可能性がある。すなわち、開催国の政治や経済、社会に関する情報が、五輪を触媒としてクローズアップされることで、そのニュース価値が高まる。しかし、開催国と日本との関係がさほど密接ではない場合、そうしたニュース価値の変化はみられない。

もちろん、中国ほど密接な関係にない開催国であっても、五輪開催期間に発生した事件であれば、期間外よりはニュースとして報道される可能性は多少なりとも高まると考えられる。とはいえ、その可能性は事件の発生地が五輪の開催国ではない場合とさほど変わらないだろう。

6.2 ニュースの分野

ニュースの分野の報道量を比較すると、各五輪の開催期間において「900 スポーツ」が占める割合が最も多く、それに「300 社会」が次ぐ割合を示した。「900 スポーツ」の中心は五輪競技に関するニュースであったが、甲子園、プロ野球、そして大リーグといった国内外の野球に関するニュースも報道されていた。

異論を承知で述べるならば、「900 スポーツ」のニュースは私たちにとって必要不可欠な情報ではない。それは、五輪競技に関するニュースにおいても例外ではない。しかしながら、「900 スポーツ」のニュースは、各五輪の開催期間においてニュース本数ないしニュース時間の半分に迫る割合を示していた。したがって、少なくとも五輪の開催期

間に限っては、ニュース番組において最も高いニュース価値を有していたのは「100 政治」や「200 経済」、そして「300 社会」といった分野の情報ではなく、「900 スポーツ」といういわばエンターテインメントに分類される情報であった。

なお、次点の「300 社会」が報道量に占める割合であるが、北京五輪からロンドン五輪にかけて減少したものの、リオ五輪では数値を戻している。ここでリオ五輪の開催期間における「300 社会」のニュースの内訳を確認すると、「天皇の生前退位」の話題が注目を集めていた⁽¹⁷⁾。国民的関心を集めたこの話題がなかった場合、リオ五輪における「300 社会」が報道量に占める割合は、ロンドン五輪と同程度だった可能性がある。

次いで、五輪競技の報道量について考察してみよう。一般に、メダル、とりわけ金メダルの獲得はニュースとしての価値が高いと考えられ、その結果としてその競技の報道量が増加することが予想される。それでは、実際にメダルの獲得は報道量にどのような影響を与えたのだろうか。表17および図18は、表15および表16で示した報道量の多い5競技に、メダル獲得数のデータを割り振ったものである。メダルの種類と数が実際の報道量に影響を与えるのかを検討するため、各競技の総メダル数のデータを参考として付記した。

表17 報道量上位5競技のメダル数（本数）

順位	コード	北京五輪			コード	ロンドン五輪			コード	リオ五輪		
		金	銀	銅		金	銀	銅		金	銀	銅
1	905 水泳	2	0	4	906 サッカー	0	1	0	905 水泳	2	2	5
2	904 陸上競技	0	0	1	922 柔道	1	3	3	919 卓球	0	1	2
3	929 野球	0	0	0	905 水泳	0	3	8	922 柔道	3	1	8
4	906 サッカー	0	0	0	904 陸上競技	0	0	1	904 陸上競技	0	1	1
5	922 柔道	4	1	2	914 レスリング	4	0	2	912 体操	2	0	1
	合計	6	1	7	合計	5	7	14	合計	7	5	17
	総メダル数	9	6	10	総メダル数	7	14	17	総メダル数	12	8	21

表18 報道量上位5競技のメダル数（時間）

順位	コード	北京五輪			コード	ロンドン五輪			コード	リオ五輪		
		金	銀	銅		金	銀	銅		金	銀	銅
1	905 水泳	2	0	4	906 サッカー	0	1	0	905 水泳	2	2	5
2	929 野球	0	0	0	905 水泳	0	3	8	919 卓球	0	1	2
3	906 サッカー	0	0	0	914 レスリング	4	0	2	912 体操	2	0	1
4	904 陸上競技	0	0	1	922 柔道	1	3	3	922 柔道	3	1	8
5	922 柔道	4	1	2	904 陸上競技	0	0	1	914 レスリング	4	3	0
	合計	6	1	7	合計	5	7	14	合計	11	7	16
	総メダル数	9	6	10	総メダル数	7	14	17	総メダル数	12	8	21

これらのデータから、メダルの獲得が必ずしもそのまま報道量につながっているわけではないことがわかる。その極端な事例が、北京五輪である。金メダルを含め最も多くのメダル（金メダル4個、銀メダル1個、銅メダル2個）を獲得した「922 柔道」は、ニュース本数で5位（6.3%）、ニュース時間でも5位（5.6%）であった。また、「922 柔道」に次ぐメダル数（金メダル2個、銀メダル2個、銅メダル2個）を獲得した「914 レスリング」は、ニュース本数で8位（3.0%）、ニュース時間でも8位（3.2%）であった。両競技に関するニュースは、その獲得したメダル数に比例する報道量を示さなかった。対して、同五輪においてメダルを獲得できなかった「929 野球」や「906 サッカー」の報道量は、ニュース本数およびニュース時間において、「922 柔道」および「914 レスリング」を上回った。

それでは、メダルの獲得以外で何が五輪競技の報道量に影響を与えているのだろうか。その要因として、3つの点が考えられる。

第1に、競技の種目数である。種目数が多くなれば、必然的にその競技に関するニュースの報道量は増加する。例えば、北京五輪では28競技302種目、ロンドン五輪では26競技302種目、そしてリオ五輪では28競技306種目が実施されたが、各五輪で最も多い競技種目は「904 陸上競技」の47種目であり、それに次ぐのが「905 水泳」の46種目であった。その種目数を反映するように、「904 陸上競技」の報道量は、ニュース本数で北京五輪2位、ロンドン五輪4位、リオ五輪4位、そ

してニュース時間で北京五輪4位、ロンドン五輪5位、リオ五輪7位となっている。そして、種目数の割に成績が振るわないためであろうか、いずれの五輪でもニュース本数と比較してニュース時間の順位が下がる傾向にある。対して、「905 水泳」の報道量は、メダルの獲得の影響もあってニュース本数で北京五輪1位、ロンドン五輪3位、リオ五輪1位、ニュース時間で北京五輪1位、ロンドン五輪2位、リオ五輪1位となっており、ニュース本数およびニュース時間のいずれにおいても、各五輪で上位3位を占めた。

第2に、競技の日本国内での人気である。この場合、メダルはその指標となるが、必須条件ではない。例えば、北京五輪における「929 野球」は、準決勝および3位決定戦ともに敗れてメダル無しの4位に終わった。大会を通じた成績は4勝5敗であり、決して良いとはいえない。しかしながら、ニュース本数で3位、ニュース時間で2位であった。また、同五輪における「906 サッカー」は、「男子サッカー」はグループリーグで1勝もできずに最下位で敗退し、「女子サッカー」は3位決定戦で敗れてメダル無しの4位に終わった。しかしながら、ニュース本数で4位、ニュース時間で3位となった。

メダルがなくともこれだけの報道量があるということは、メダルの獲得はそれに大きな影響を与える。事実、ロンドン五輪において「男子サッカー」が3位決定戦で敗れたものの4位となり、「女子サッカー」が銀メダルを獲得したことで、「906 サッカー」の報道量はニュース本数、ニュース時間ともに圧倒的な1位となった。同競技が五輪関係のニュースで占めた割合はニュース本数で20.5%、ニュース時間で24.4%であり、調査対象となった3つの五輪で最高値を示している。

第3に、競技の「物語性」である。この場合、メダルは重要な指標となる。なぜなら、それは努力と挑戦が報われた証拠として意味を持つからである。そして、それが悲劇である場合には、メダルは失われた栄誉としての意味を持つ。また、この「物語性」の対象となる競技

は、大きく2つに分けられる。それは、団体と個人である。前者は「史上初」という言葉とともに「世界」への挑戦の物語として、後者は個人の努力と挫折の物語として語られる傾向にある。ここで、各五輪においてその「物語性」が報道量に影響を与えたと考えられる代表的な競技を取り上げて考察したい。

北京五輪において「物語性」が強調されたのは、「904 陸上競技」である。同競技は、北京五輪では銅メダルを1個、ロンドン五輪では銅メダルを1個、リオ五輪では銀メダル1個、銅メダル1個を獲得した。メダルの数としてはリオ五輪が最も多く、北京五輪とロンドン五輪は同じである。しかし、北京五輪における同競技の報道量はロンドン五輪やリオ五輪と比較して2倍弱に達していた。北京五輪の「904 陸上競技」において、「物語性」が影響を与えたのは2種目ある。それは、「男子4×100m リレー」と「女子マラソン」である。

「男子4×100m リレー」は、「904 陸上競技」において唯一のメダルとなる銅メダルを獲得した。そのメダル獲得が「物語性」を帯びた理由は、それが「日本短距離史上初のメダル獲得」であったからである。体格的に日本人には不向きと考えられてきた種目における初のメダルの獲得は、日本陸上界の悲願を達成したとして他競技の金メダル以上の賞賛をもって報道された。同種目の「904 陸上競技」における報道量は、ニュース本数は2番目の14.0%、そしてニュース時間も2番目の20.5%であった。

そして最も報道量が多かったのが、「女子マラソン」である。その「904 陸上競技」におけるその報道量は、ニュース本数は35.1%、ニュース時間は37.1%であった。北京五輪における同種目の成績は入賞選手もおらず、特筆すべきものはなかった⁽¹⁸⁾。それでも報道量が多かった理由は、金メダル候補と目されていた野口みずき選手が、大会直前に出場辞退したためである。前回大会となるアテネ五輪において金メダルを獲得した野口選手は、「五輪史上初めての女子マラソン2連覇」が期待されていた。その夢が潰えたことは悲劇として注目を集め

た。「女子マラソン」に関する報道のうち、実にニュース本数の75.0%、ニュース時間の70.8%が野口選手の辞退に関するものであった。

ロンドン五輪において「物語性」が強調されたのは、「906 サッカー」である。同競技は、先述のように「男子サッカー」が4位、「女子サッカー」が銀メダルを獲得し、3つの五輪において特筆すべき報道量を示した。とりわけ、その報道量に貢献したのは「女子サッカー」である。「906 サッカー」における「女子サッカー」の報道量は、ニュース本数で61.1%、ニュース時間で60.2%を占め、いずれも「男子サッカー」の1.7倍近い数値を示した⁽¹⁹⁾。

「女子サッカー」の銀メダル獲得が「物語性」を帯びた理由は、それが「日本サッカー史上初の銀メダル獲得」であったためである。それまで、日本サッカー界で最も良い成績は、1968年のメキシコ五輪における「男子サッカー」の銅メダルであった。銀メダルの獲得は、それを超える快挙として受け止められた。そのことを示すように、銀メダルの獲得を伝える2012年8月10日のニュースのタイトルテロップ／サブタイトルテロップには、「なでしこ涙と笑顔… 男女通じ史上初の銀メダル」(NHK ニュース7)、「なでしこジャパン 悲願の銀メダル獲得」(NEWS ZERO)、「史上初 なでしこ銀メダル 快挙を支えた世界の絆」(NEWS23X)、「なでしこ笑顔が咲いた 快挙！史上初の銀メダル」(報道ステーション)といったように、「日本サッカー史上初の銀メダル獲得」を強調する文言が並んでいた。

リオ五輪において「物語性」が強調されたのは、「919 卓球」である。同競技は、リオ五輪において銀メダル1個、銅メダル2個を獲得した。その内訳は、「男子団体」で銀メダル1個、「男子シングルス」および「女子団体」で銅メダル各1個である。表19および図20は、「919 卓球」のニュースをそれぞれニュース本数およびニュース時間でカウントしたものである。

表19 「919 卓球」 種目別報道量（本数）

種目	本数	割合
女子シングルス	11	26.2%
女子団体	11	26.2%
男子シングルス	8	19.0%
男子団体	8	19.0%
その他	4	9.5%
合計	42	100.0%

表20 「919 卓球」 種目別報道量（時間）

種目	時間	割合
女子団体	4,075	40.2%
男子団体	3,281	32.4%
男子シングルス	1,752	17.3%
その他	515	5.1%
女子シングルス	511	5.0%
合計	10,134	100.0%

上記のデータからは、「919 卓球」においてメダルの獲得が必ずしもそのまま報道量につながっているわけではないことがわかる。「男子団体」は銀メダル、「女子団体」は銅メダルを獲得したが、「女子団体」の方がニュース本数、ニュース時間ともに多い。また、銅メダルを獲得した「男子シングルス」よりもメダル無しに終わった「女子シングルス」の方が、ニュース本数が多い（ちなみに、「女子シングルス」のニュース時間は最も少ない）。

一見アンバランスなニュース本数とニュース時間の分布の要因となっているのは、卓球女子代表の福原愛選手の存在である。幼少期から活躍し長らく日本卓球界のヒロインであり続けてきた「愛ちゃん」こと福原選手は、リオ五輪において女子最年長で代表に選出された。これまで4回連続で五輪に出場し、大会後の引退が囁かれていた福原選手は、最後の五輪にふさわしい活躍をみせた。「女子シングルス」ではメダルの獲得を逃したが初の準決勝進出を果たし、続く「女子団体」では直前に骨膜炎を発症して状態が危ぶまれたものの3位決定戦のダブルスで1勝を挙げ、2大会連続となる銅メダル獲得に貢献した。

福原選手の活躍は、まさにヒロインの有終の美を飾るものとして強い「物語性」を感じさせ、そのニュースに高い価値を与えることになった。例えば、「女子シングルス」のニュース11本のうち、9本のタイトルテロップ／サブタイトルテロップに、「福原愛」の名前が入っている。すなわち「女子シングルス」のニュースは福原選手ありきで報道されており、それゆえにニュース本数は多かったが、メダル獲得に

至らなかったことでニュース時間が少なくなったと考えられる。

そして、「女子団体」における銅メダルの獲得を伝える2016年8月17日のニュースは、そのタイトルテロップ／サブタイトルテロップに「涙の銅メダル」（NHK ニュース7）、「卓球女子団体“涙の”銅メダル」（NEWS ZERO）、「卓球女子団体 涙の銅」（NEWS23）といったように、メダル獲得を感動的なドラマとみなす文言が並んでいた。また、「福原が引っ張った 卓球女子団体」（NHK ニュース7）、「福原愛選手（27）『苦しいオリンピック』… “重圧”との戦い」（NEWS ZERO）といった、重圧の中でキャプテンとしての責務を果たした福原選手を強調する文言も目立った。そして、銅メダルを獲得した「女子団体」のニュース時間は「919 卓球」の40.2%を占めるに至り、銀メダルを獲得した「男子団体」のニュース時間32.4%を上回った。

現在の五輪放送の原型を作った代表的な人物の1人として、米国のABC テレビでプロデューサーを務めたR・アーリッジがいる。そのアーリッジが最も重視したのが「up close and personal」——選手に近づき、その個人に迫るという手法であった。彼は実況するアナウンサーに選手のエピソードやバックグラウンドを強調させることで、競技に「物語性」を付与しようとした（Billings 2018: 31-33）。リオ五輪の「919 卓球」における福原は、その典型的な事例であったと述べることができるだろう。

以上、メダルの獲得以外で五輪競技の報道量に影響を与える要因について考察した。五輪競技の報道量は、メダルの獲得だけが要因ではなく、それ以外の複数の要因が影響していると考えられる。上記以外の要因としては、ある競技に対するメダル獲得への期待が、同競技がニュースとなる可能性に影響を与えることが想定される。例えば、北京五輪における「929 野球」の報道量は、2006年開催の第1回ワールド・ベースボール・クラシックでの日本代表の優勝がもたらした期待が影響した可能性がある。同様に、ロンドン五輪における「906 サッカー」における「女子サッカー」の報道量は、2011年開催のFIFA 女

子ワールドカップにおける優勝がもたらした期待が影響した可能性がある。他の競技においても、同様の事例は想定できる。しかし、本研究においてそれを検証可能なデータは存在しない。したがって、メダル獲得への期待が報道量に影響を与える可能性については、仮説として述べるに止めたい。

7 おわりに

情報の種類に応じて掲載面がある程度決まっている新聞とは異なり、テレビのニュース番組は特定のコーナーが設けられているわけではなく、番組内におけるニュースの「発生地」および「分野」は、その時々状況に応じて大きく変動する。本研究が対象とした3つの五輪の開催期間においてそれらは多少の変動はあっても安定した傾向を見せ、結果として五輪の開催期間における日本のニュース番組の普遍的な報道傾向を明らかにするという本研究の目的は、ある程度は達成できたと考える。もっとも報道内容の安定は、中（2010）で指摘されているように、ネガティブなニュースが周縁化された結果である可能性も考慮する必要がある。

本研究は、ともすれば質的研究に偏りがちな五輪に関するメディア研究に対して、量的研究の観点を示すことで、いわばその補完となることを副次的な目的としている。本研究の考察で示された内容は、人によっては「経験的」に既知の内容であろう。しかしながら、それを理由として検証せず、事実として語っても良いのだろうか。常識と考えることをあえて検証することが思い込みや先入観に対する気づきを生み、結果として研究を正しい方向に発展させると筆者は考える。

2021年夏、日本では1年の延期を経て東京五輪が開催された。自国開催であるのみならず、新型コロナウイルスの感染拡大が続く極めて特殊な状況下での開催となった同五輪は、日本のメディア研究にとって非常に重要な研究対象となった。筆者もまた、あらためて今後の研

究課題にしたいと考えている。

注

- (1) 藤竹の指摘は、NHK 放送世論調査所が1967年に刊行した『東京オリンピック』に収録されている。同書において藤竹は著者としての記載はないが、「分析・解釈」を担当している旨の説明がある（NHK 放送世論調査所 1967: i）。
- (2) NHK の代表的なニュース番組としては、ほかに『ニュースウオッチ9』が存在する。しかし同番組は競技の実況中継などによって放送を見合わせる機会がたびたびみられたため、『NHK ニュース7』を対象としている。
- (3) 北京五輪の時点では『NEWS23』であったが、ロンドン五輪の時点では『NEWS23X』（2010年3月29日改編）であった。リオ五輪の時点では『NEWS23』（2013年4月1日改編）に名前を戻している。
- (4) 北京五輪およびロンドン五輪の時点では『ニュース JAPAN』および『すぽると!』であった。これら2つの番組は、コンプレックス枠としてニュース番組として連続した時間帯に編成されているため、本研究ではまとめて1つの番組として扱っている。その後、同番組は『あしたのニュース』および『すぽると!』への改称を経て、リオ五輪の時点では『ユアタイム～あなたの時間～』（2016年4月4日改編）として放送されていた。
- (5) 各五輪の開催期間は共通して17日間である。しかし、時差の関係もあって日本では報道される期間が異なる。そのため、調査期間の日数は同じではない。
- (6) コード作成にあたっては、外務省による分類を参考とした。詳しくは同省のサイトを参照のこと（2021年6月25日取得、<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/>）。
- (7) コード作成にあたっては、日本五輪委員会（JOC：Japanese Olympic Committee）による競技分類を参考とした。詳しくは同委員会のサイトを参照のこと（2021年6月25日取得、<https://www.joc.or.jp>）。
- (8) ニュース時間は、ニュースの終了時刻から開始時刻および「ニュース内CM」の時間を引くことで計測したものである。一般に、民間放送局ではニュース番組内でCMが放送される。それらのCMの多くは、ニュースとニュースの間に放送される。しかし、ときとして1本のニュースの途中でCMが入り、CM終了後に続きのニュースが放送されることがある。この場合のコマーシャルを、本研究では「ニュース内CM」と呼ぶ。
- (9) 競技以外の五輪関係のニュースに割り当てられるコード。パラリンピックに関するニュースも、このコードに含まれる。
- (10) 複数競技が1つのニュースとして放送される場合に割り当てられるコード。

- (11) 比較対象となる北京五輪のデータは中（2009）に準じているが、同研究と本研究における数値は若干異なる。中（2015）以降、集計の方針を一部変更したため、それに準じて再集計したためである。
- (12) 本研究で用いる割合（％）を示す数値は、小数点第二位以下を四捨五入している。そのため、内訳割合の合計と、内訳合計が総数に占める割合が一致しない場合がある。
- (13) 北京五輪、リオ五輪においては「2 開催国」において「900 スポーツ」に分類されたすべてのニュースが、五輪関係のニュースであった。ロンドン五輪のみ、「900 スポーツ」に分類されたニュースのうち3本がプレミア・リーグに関するものであり、具体的にはマンチェスター・ユナイテッドに移籍した香川真司選手に関するニュースであった。
- (14) 北京五輪では、「男子4×100m リレー」および「レスリング男子フリースタイル60kg 級」の2種目が、大会後に銅メダルから銀メダルに繰り上がった。
- (15) 「300 社会」に分類されたニュースのうち、唯一五輪と関係がなかったのは、ウィキ・リークスで知られるJ・アサンジ氏に対してエクアドルが亡命許可を出したことに関するニュースであった。
- (16) 2008年8月4日、新疆ウイグル自治区で武装グループによる警察署襲撃事件があった。また同月11日、同様に武装グループによる公安施設などに対する襲撃があった。
- (17) 五輪開催期間中の2016年8月8日、明仁天皇はビデオメッセージを通じて生前退位を希望する意向を示唆し、日本国内で大きな話題になった。同年7月13日の時点で天皇の意向は宮内庁関係者を通じてすでに報道されており、ビデオメッセージは生前退位に対する国民の理解を求めるものであった。
- (18) 北京五輪における「女子マラソン」の成績は、中村友梨香選手の13位が最高で、もう1人の出場選手である土佐礼子選手は途中棄権した。
- (19) 「男子サッカー」の報道量は、ニュース本数が35.6％、ニュース時間が36.5％であった。残りの報道量は、男子と女子を一緒に報道したニュースで、ニュース本数が3.3％、ニュース時間が3.2％であった。

引用・参考文献

- 阿部潔（2008）『スポーツの魅惑とメディアの誘惑——身体／国家のカルチュラル・スタディーズ』世界思想社
- Billings, A. C., Angelini, J. R. and MacArthur, P. J. (2018) *Olympic Television: Broadcasting the Biggest Show on Earth*, New York: Routledge.
- Dayan, D. and Katz, E. (1992=1996) *Media events: the live broadcasting of*

- history*, Harvard University Press. (浅見克彦訳『メディア・イベント——歴史をつくるメディア・セレモニー』青弓社)
- 萩原滋 (2007a) 「はじめに」 萩原滋編著『テレビニュースの世界像——外国関連報道が構築するリアリティ』勁草書房
- 萩原滋 (2007b) 「大学生の外国認識とメディアの役割」 萩原滋編著『テレビニュースの世界像——外国関連報道が構築するリアリティ』勁草書房
- 萩原滋 (2007c) 「テレビの中の世界情勢——外国関連報道の特質を探る」 萩原滋編著『テレビニュースの世界像——外国関連報道が構築するリアリティ』勁草書房
- 平山賢治 (2012) 「ロンドン五輪はどう観られたか？」『GALAC』2012年11月号
- 藤竹暁 (1985) 『テレビメディアの社会力——マジックボックスを解読する』有斐閣選書
- IOC (2016) IOC GLOBAL BROADCAST AND AUDIENCE REPORT Olympic Games Rio 2016. (Retrieved June 21, 2021, https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Games/Summer-Games/Games-Rio-2016-Olympic-Games/Media-Guide-for-Rio-2016/Global-Broadcast-and-Audience-Report-Rio-2016.pdf#_ga=2.209430802.1805681646.1584709093-1385879318.1584709093)
- 上瀬由美子 (2007) 「アテネ・オリンピック報道にみる外国関連情報—テレビニュース番組の内容分析から—」『メディア・コミュニケーション』No.57
- 上瀬由美子・萩原滋・李光鎬 (2010) 「北京オリンピック視聴と中国・中国人イメージの変化—大学生のパネル調査分析から—」『メディア・コミュニケーション』No.60
- 向田久美子・坂元章・村田光二・高木栄作 (2001) 「アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化」『社会心理学研究』第16巻
- 村田光二・坂元章・高木栄作 (1993) 「バルセロナ・オリンピックによる外国人イメージの変化(1)」日本社会心理学会大34回大会発表論文集
- 村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収・高林久美子 (2005) 「アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(3)—市民調査の結果—」日本社会心理学会第46回大会発表論文
- 中正樹 (2009) 「北京オリンピック開催期間におけるテレビニュースの内容分析 1—ニュース内容の量的分析—」『武蔵大学総合研究所紀要』第18号
- 中正樹・日吉昭彦・小林直美 (2015) 「ロンドンオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道に関する内容分析」『ソシオロジスト』第17巻第1号
- 中正樹・日吉昭彦・小林直美 (2020) 「五輪開催期間におけるニュース番組の開催国報道——リオ五輪を事例として——」『ジャーナリズム&メディ

ア』第15号

NHK 放送世論調査所 (1967) 『東京オリンピック』 NHK 放送世論調査所

Real, M. (1989) *Super Media: A Cultural Studies Approach*, Newbury Park: Sage Publications.

佐久間勲・日吉昭彦 (2017) 「ロンドン・オリンピック大会と国民イメージの変化」『社会情報学』第6巻1号

高木栄作・坂元章 (1991) 「ソウル・オリンピックによる外国イメージの変化——大学生のパネル調査——」『社会心理学研究』第6巻

横山滋 (2007) 「トリノ・オリンピック報道における外国関連情報と中立性——『ニュース10』『ニュース23』『報道ステーション』の場合——」『メディア・コミュニケーション』No.57